

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
冬 眠を 覚め ず i d é e の 窓を 開け	造 語と して 織ら れた 襪に 住む	酷 暑日 の石 を葡 萄に する 造語	有 限な れば 枯野 も炎 月二 つ	移 気空 木の 不死 の少 女性	王 権を ふた なり の鹿 走り 過ぎ	移 らじ は重 力に ある 詩歌 の虎	六 番の 獅子 の落 下よ く光 る	真 夜中 を透 けつ つ歩 く哲 学の 鳥	蜜 垂ら す蛇 を解 剖け ば割 れ鏡	鼻 の調 停ガ ラス の森 を呼 ぶ	こ こに 茸あ そこ に茸 のく らい 夢	表 象の 眠り どこ までも 象の 皮膚	接 続に 無が あれば 飛ぶ 垂直 の鳥	遠 雷や 時間 に棲 まる 雀蜂	神 でな いも のが 祈り を聞 きに けり	霞 より 出で る腕 に鹿 滅ぶ	く ちな わの 口よ り双 の犬 生れ る	盲 目の 馬の 進む や大 枯野	唯 一の この 青空 やK A R A S H I N A や	海 百合 の頸 吊の 木の えく れえ る	夜 藍の 大花 野よ り魔 女二 人	優 曇華 の忘 れを 不二 の辻 に置 く	眼 奥の 昏きを 隔ち 羽音 くる	火 を消 して一 身体 の一 世界

50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26
一角獣の偽史にふたなりを末裔する	蜜蜂 <i>the le p a t h</i> こおりの星は鎖骨あたり	森林を老夫におけば半月が遅れ	青薔薇、盃の間にさかしまは止まってゐる	陵墓の虚空に南中の繭「コクーン」を置こう	文語に降り来るものの遊牧とその回転	手淫の上昇を帰して観音は・・・開く！	赤はグラネロを垂れて牡牛座のAとなり	篡奪にして流麗 <i>è t o i l e</i> を並ぶ <i>h i s t o i r e</i>	始点にして真円 <i>p o m m e</i> が <i>h o m m e</i> を曳く	風月とならず天上火忌に揺れ	天上も花鳥に捨てよ人語解	雀蜂忌その属性に帆を張って	雀蜂忌濡れる真理に毛立つ夢	一行の痛覚はらい天上火忌	蟲泳ぐ天上火忌を言語とし	モル状の蝶に天上火忌増えよ	天上火忌よ遊泳ようまのやみ	天上火忌や蜂は飛ぶラテン語へ	天上火忌のみず水を躊躇わず	天上火忌を滑りだし桃に満ち	天上火忌の北天を廻りそむ	破局、その昇りに生まるほととぎす	虎杖は斃れば火星の永遠廻り	古遊戯や廻る花天の <i>r i v i è r e</i>

- 75 倒木の *ergo* に降れば昇る伊奘冉
- 74 果実に *Allice* を追い *Lilith* の天気雨
- 73 宇宙飛行士はタンゴに亜時間を立てる
- 72 ソクラテスの *id* に一滴の  $\wedge$  神  $\vee$  を落とす
- 71 赦されざる (氷片に *sperma* は南中する) 赦しを!
- 70 地衣類の鼓動に明ける犬戎の暮れ
- 69 いまわの火に鶴は延びフォーマルハウトを成る
- 68 谷間の墜落に添える薔薇 *décration* は視てゐた
- 67 天文の森には白狐が非ユークリッドを降ろす
- 66 光線消失火に向う老犬が非時の躍動へ帰る
- 65 沛艾のアイコンや閉鎖病棟に蟲の遊泳
- 64 芸術論の出来をアウシュヴィッツの林檎が隔つ
- 63 夜汽車やソルボンヌに昇る歌劇の *сутра*
- 62 外在する (遠雷、ヴードゥーの蜂は這い回る  $\wedge$  色  $\vee$ ) 自我
- 61 黒・・・に火遊びの神は純粹の犬を解く
- 60 一つ天文接続の毛布に蒸気船くる
- 59 目玉の忌惑星を閉じその反復の詩
- 58 舞台の真円軌道には歪みが答えよう
- 57 女陰の忌 *erect* は *elect* に満ち干きを牽く
- 56 白樺が象徴のうしろに直線円の感性
- 55 夜汽車よおまえは眠りから想像まで貝を運ぶ
- 54 瞳の楕円に沈めば月桂樹「ローリエ」が勃つ
- 53 博物は冷酷を成す 白色のガレオン!
- 52 風の化石は羊歯を通れば顕生代が透ける
- 51 比喩の火を踊るくらげが阻んでいよう

100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76  
 花鳥書の棲む両岸や炎、我が  
 漏沙「すなごけい」未だ凍っていた背後  
 雄鹿やや動き千歳の森動く  
 凍てる風凍てる唐檜に滅びつつ  
 連峰を回帰を董ただ一つ  
 落陽にただ肉体の沛艾や  
 大河その美の痛覚の距離「ディスタンス」  
 綴ぢられて白光にまだ重き画家  
 気嵐や浮力のままに大白鳥  
 水脈となり我が風月よ英雄よ  
 だが会わねばならぬ灰の無き定型  
 数字の服を剥ぎ取れば八つ足の葉  
 嫌ひだおまへが（とにかく）嫌ひだ（眠い）おまへが  
 昇らないその七をどこに隠すのか  
 不具に書く自意識に書く星月夜  
 落ちる（風鈴の闇に手足や寝るをんな）襤褸  
 風鈴を売る風鈴売りを売るおまへかな  
 おまへのゾンビ信仰を蟹が横切るよ  
 「季語ここに眠る（ページは変えないでください）」  
 夏痩せて嫌ふべきものなお愛す  
 幾何学の飛行に塔のでんぷん質が飢える  
 天使は斥力を凝視するひたすらのくれなる  
 レオナルドの微笑をうつろぶねに流す  
 仙人掌に扉を吸い啓く千二十四畳  
 半球体の眠りを脱ぎ言葉の椅子に棲む